



「持続的開発のための農林水産国際研究フォーラム」設立総会で挨拶する東久雄会長（コラム、巻頭言参照）

巻頭言

農林水産分野における国際的な研究協力

国際農業研究協議グループ（CGIAR）科学理事会 理事
農林水産技術会議委員 貝沼 圭二

研究開発をめぐる 最近の動き

「アグリビジネス創出フェア」の基本計画まとまる < p 3 >
キャッチフレーズは「新産業のアイデアはここにある！」

「世界イネ研究会議」の基調講演決まる < p 4 >

研究基本計画検討専門委員会の最近の動き < p 4 >

日中農業科学技術交流グループ会議を開催 < p 5 >

「みんなで考えるバイテク」の推進に向けて < p 6 >

総合科学技術会議有識者議員との懇談会を開催 < p 6 >

農林水産分野における国際的な研究協力

国際農業研究協議グループ (CGIAR) 科学理事会 理事
農林水産技術会議委員

貝沼 圭二



本年1月、国際農業研究協議グループ (CGIAR) 科学理事会が新設された。これは技術諮問委員会を解消して、さらに高度の判断と提言をする少人数で構成される委員会として創設されたものであり、筆者はその理事に就任した。世界の候補者350人から選ばれた7人の理事は、地域別、性別、専門別などのバランスを考慮して選考されているが、各専門分野で研究業績があることと研究運営および管理、開発研究の経験があることなどが条件になっている。

CGIARは、15の国際研究センター (略称CGセンターで所在地はアジア、アフリカ、南米、中東、北米、EUなど) を有し、その他支所、共同研究サイトを加えると100カ国以上に8,500名を越える科学者及びスタッフを擁する世界最大の国際農業研究組織である。

科学理事会の活動はまだ始まって間もないが、最近CGIAR組織の中にかんがりの意識の变革を感じている。たしかに今までもCGIARは、研究を通じて途上国の食糧問題、貧困からの脱出などを大きな目標に活動してきた。そして、その方法は、CGIARと途上国の研究組織の間で自己完結的に解決していく傾向が強かった。

しかしながら、現在のCGIARは、これに加えて先進工業国の研究組織などとの連携や研究における協力体制を強化し、優秀な人材をCGセンターに迎

え、研究の質を高めることを強く求めている。また、双方向の連携として、CGセンターの研究を通じて世界の農業科学を活性化するという方向で、各国の農業アカデミー、科学アカデミー、科学会議などの政策決定機関や諮問機関との連携を積極的に進めようとしている。わが国は、長い間CGIARの基金拠出において世界有数の位置にあると同時に、研究者を派遣して行った共同研究の実績は非常に大きいものの、CGIARの幹部職員を多く輩出するには未だ至っていない。現在はメキシコにある国際トウモロコシ・小麦改良センターの岩永勝所長を除くと皆無に近い。

将来国際研究を志す研究者育成のために今年スタートする意欲ある若手研究者をCGセンターに派遣するための制度、あるいは従来大学や研究機関、JICA、JETRO、民間企業などが独自に行ってきた国際研究協力の情報や成果を国レベルで共有し、意思の疎通を密にするための組織「持続的開発のための農林水産国際研究フォーラム」の創設などにみられる最近の動向は、農林水産業における戦略的な国際研究協力のプラットフォームの設立として高く評価できる。このような動きこそが、現在科学理事会が世界規模で進めようとしているCGIARと外部の連携を強める動きを先導するものである。



7月28日、東京国際フォーラムのやや小さめのホールに国際開発関係の大学をはじめ、団体、JIRCASや官庁の関係者が結集しました。「持続的開発のための農林水産国際研究フォーラム」の設立総会のためです。各種の国際プロジェクトは従来の組織を超えた横断的なものが増えてきていることから、オール・ジャパンの組織横断的な協調と連帯を図るプラットフォームとして設立されたものです。関係者の交流や情報の共有を進めるとともに、国内外への活発な情報発信が行われることによって、一層効果的な研究活動の推進が期待されます。なお、このフォーラムの設立総会と同日行われた設立記念講演会の詳細については次号に掲載します。



会長に就任し挨拶する東久雄FAO協会理事長

研究開発をめぐる最近の動き

「アグリビジネス創出フェア」の基本計画まとまる

－ 新産業のアイデアはここにある！ －

先端産業技術研究課

10月14日(木)・15日(金)の両日、東京国際フォーラム展示場において「アグリビジネス創出フェア」を開催する旨は、本紙6月号でお知らせしたところですが、この度、本フェアの基本計画がまとまりましたので、その概要を報告します。

本フェアの目的は、技術移転や研究成果の事業化、市場開拓などのビジネスチャンスの創出にあることから、「新産業のアイデアはここにある！」を合い言葉に、会場内に設置された各ブースにおいて、

- ①農林水産分野の研究機関における研究開発の取組状況・成果の紹介
 - ②研究者による共同研究テーマの提案(プレゼンテーション)
 - ③研究開発やベンチャー創出支援に係る行政施策の紹介
- などを行います。

ロゴマークを作成

また、農林水産・食品分野における産学官連携をイメージし、ロゴマークも作成しました。ロゴマー

クについては、本フェアのみならず、今後の産学官に関する取組みにおいて広く使用していきたいと思っています。

出展希望が続々

現在、基本計画に基づき、ブースへの出展希望者を募っているところですが、農水省の関係部局・所管の研究開発型独立行政法人はもとより、全国の大学、地方公設試などから、多数の希望が寄せられています。

国内の農林水産・食品産業分野における研究開発関連情報が一気に入手できるイベント、それが「アグリビジネス創出フェア」です。

本フェアに関する最新情報は、随時、ホームページを通じて提供しています。

詳しくは、<http://agribiz.jp/> をご覧下さい。

また、ご意見・ご質問等については

e-mail: agrifair@staff.or.jp をご利用下さい。

みなさんのご来場を心よりお待ちしております。



■オレンジ色の図形は「Business」の「B」と「Agriculture」から生まれる「ハート」を表現。

■グリーン色の三角は「Agriculture」の「A」と同時に「産・学・官」の連携を表現。

ロゴマーク

Agribusiness Creation Fair 2004

アグリビジネス創出フェア

新産業のアイデアは、ここにある！

■2004年10月14日(木)・15日(金) 10:00～17:00

■東京国際フォーラム展示ホール(地下2階)

〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-5-1

(JR有楽町駅より徒歩1分、地下鉄有楽町駅と地下コンコースにて連絡)



■主催：農林水産省／(独)農業・生物系特定産業技術研究機構／(独)農業生物資源研究所／(独)農業環境技術研究所／(独)農業工学研究所／(独)食品総合研究所／(独)国際農林水産業研究センター／(独)森林総合研究所／(独)水産総合研究センター
 ■共催：(社)農林水産先端技術産業振興センター／(社)農林水産技術情報協会／(財)食品産業センター／(独)家畜改良センター／(独)水産大学校

「世界イネ研究会議」の基調講演者と演題決まる

国際研究課

本年11月4日から7日に開催します「世界イネ研究会議」の東京シンポジウム及びつくばシンポジウムの基調講演等の概要をご紹介します。

「世界イネ研究会議」では、「作る」、「生きる」、「暮らす」、「共生する」の4つをメインテーマにしており、4日の東京シンポジウムでもこのテーマに沿って4名の講師により基調講演が行われます。

「作る」では、国際稲研究所（IRRI）の前部長で、病害・虫害・不良土壌等にも強いイネ「IR36」を1976年に育成し、「緑の革命」として熱帯・亜熱帯諸国の米の生産安定および自給達成に大きく貢献し、国際食糧賞、日本国際賞を受賞されたグルデブ・S・クッシュ博士を迎え、演題「Rice Production : Past, Present and Future (コメの生産：過去、現在、未来)」をご講演いただきます。「生きる」では、女子栄養大学学長の香川芳子先生を迎え、演題「日本人の食におけるコメの意味」を、「暮らす」では、「砂の文明・石の文明・泥の文明」の著者であり、麗澤大学の国際経済学部教授の松本健一先生を迎え、演題「定住する力」を、「共生する」では、国際食料政策研究所（IFPRI）のヨアヒム・フォン・ブラウン所長を迎え、演題「The Changing Economics and Politics of Rice : Implications for Food Security, Globalization, and Environmental Sustainability (変化するコメの経済及び政策（食料安全保障、グローバリゼーション及び持続可能な環境利用との密接な関係）」をご講演いただきます。

東京シンポジウムでは、基調講演に続きパネルディスカッションを行う予定としております。パネルディスカッションのパネリストには、基調講演者

に加えIRRI所長のロナルド・カントレル氏、西アフリカ稲開発協会（WARDA）所長カナヨ・ヌワンゼ氏を迎え、それぞれアジア地域、アフリカ地域のイネの研究開発の観点から議論をいただきます。議論の進行役として、社団法人国際食糧農業協会理事長であり国際コメ年日本委員会副会長である東久雄氏、独立行政法人国際農林水産業研究センター理事長岩元睦夫氏を予定しております。

東京シンポジウムでは、研究者の方だけでなく一般の方を対象に、幅広く今後のイネ研究に関する情報を発信することとしています。

つくばシンポジウムにおいても、5日午前の開会式において3名の基調講演を予定しています。地球規模の食料、エネルギー、物質循環と人口との関係をライフワークとしているカナダ・マニトバ大学バクラフ・スミル教授を迎え、演題「Feeding the World in the 21st century (21世紀の食糧問題への対応)」をご講演いただく他、IRRI所長のロナルド・カントレル氏からは、演題「Research Strategy of Rice in the 21st century (21世紀のイネ研究戦略)」を、日本大学中村良太教授からは、「Development of Sustainable Agriculture founded on rice, water and living environment (稲—水—生活環境に根ざした持続的農業の開発)」をご講演いただきます。

その他「世界イネ研究会議」のプログラムの詳細についても決まり次第、随時ホームページ上 (<http://www.jircas.affrc.go.jp/seminar/WRRC2004/>) でご案内します。

研究基本計画検討専門委員会の最近の動きについて

－ 有識者と意見交換 －

研究開発企画官室

さる7月20日および7月26日に農林水産省において第4回および第5回研究基本計画検討専門委員会を開催しました。

【第4回研究基本計画検討専門委員会】

日時：平成16年7月20日 14：00－16：30
場所：農林水産省農林水産技術会議委員室

【第5回研究基本計画検討専門委員会】

日時：平成16年7月26日 14：00－17：00
場所：農林水産省農林水産技術会議委員室

○議事1. 有識者との意見交換会

新たな研究基本計画策定の参考とするため、農林水産関係団体、経済団体、消費者及び日本学術会議の分野の方々から農林水産研究に期待する事柄について御意見をいただいた後、意見交換を行いました。

第4回研究基本計画検討専門委員会

- ・全国林業研究グループ連絡協議会会長

田中 惣次

- ・(社)大日本水産会専務理事

吉崎 清

- ・主婦連合会参与

和田 正江

第5回研究基本計画検討専門委員会

- ・全国農業協同組合中央会常務理事

中村 祐三

- ・キリンビール(株)アグリバイオカンパニー社長

松島 義幸

- ・日本学術会議第6部部長

祖田 修

(報告順、敬称略)

○議事2. 農林水産研究に関する基本計画について「農林水産研究の理念・役割」、「新たな研究基本計画における研究開発の重点目標」及び「優れた研究成果の創出と実用化のための研究開発システム」について議論を行いました。

なお、第6回研究基本計画検討専門委員会は8月24日(火)に農林水産省において開催する予定です。詳細は、農林水産技術会議事務局ホームページをご覧ください。

<http://www.s.affrc.go.jp/docs/mokuhyo/iinkai.htm>

日中農業科学技術交流グループ第23回会議を 中国・西安で開催

国際研究課

日中農業科学技術交流グループ第23回会議が、7月12日(月)～13日(火)、中華人民共和国西安市において開催されました。

日本側は坂野技術総括審議官を首席代表として、国際部国際協力課他、関係課長クラスが出席し、農林水産技術会議事務局からは勝山国際研究課長が出席しました。一方、中国側は金世生農業部国際合作司副司長を首席代表として、関係司の代表が参加しました。

会議では、両国の農林水産業の現状と技術行政の課題、試験研究の動向などを相互に説明するとともに、両国間の共同研究課題や今年度の交流計画等について討議しました。

共同研究課題

1997年度から2003年度まで実施された「中国における主要食料資源の持続的生産及び高度利用技術の開発」が多くの成果を上げて終了したことが報告され、新規共同研究「中国食料の生産と市場の変動に対応する安定供給システムの開発」が2004年度から2008年度まで実施されることにつき、日中双方が合意しました。

交流計画

日本側から

- ・農畜産物廃棄処理の実態調査及びエネルギー変換等の農畜産物廃棄物の有効利用に関する共同研究(技術会議)



- ・材木の遺伝子組換えに関する調査研究(林野庁)
- ・中国沿岸における大型クラゲ類の生態、発生状況、来遊予測に関する研究協力(水産庁)
- ・植物新品種の育成者権に関する審査・登録にかかる情報交換・協力(生産局)

中国側からは

- ・日本植物検疫管理制度に関する調査
- ・日本植物新品種権審査に係る情報交換・協力
- ・日本土壌肥料技術に関する調査
- ・日本における農業分野の国際協力動向に関する調査について、それぞれ派遣することとしました。

今回の会議においては、日中間の農林水産業を取り巻く環境が大きく変化していることを両国間で認識し、今後も引き続き相互に技術的な交流や共同研究等を実施していくこととしました。

「みんなで考えるバイテク」の推進に向けて － 推進事業の第1回企画評価会を開催 －

技術安全課

農林水産技術会議では、平成15年から（社）農林水産先端技術産業振興センター（STAFF）に委託して「みんなで考えるバイテク」推進事業を実施しています。

遺伝子組換え技術等のバイオテクノロジーは、地球的課題となっている人口・食料・環境・エネルギー、医療等の問題の解決に不可欠な、次世代のテクノロジーとして大きな役割を果たすことが期待されています。

一方、技術の著しい進歩により、バイオテクノロジーに関する情報が複雑化していること、また、日常生活でなじみが薄い、遺伝子等に関する基礎知識や情報を持ち合わせていないこと等から、バイオテクノロジーの利用に関して不安感を持たれる方もいます。

この「みんなで考えるバイテク」推進事業は、農林水産・食品分野におけるバイオテクノロジーの内容、有用性、安全性、必要性、研究開発や実用化状況等について、バイオテクノロジーに関心のある方一般の方々、さらには若い方々にも情報を発信し、バイオテクノロジーや遺伝子組換え農作物・食品について正しく理解していただき、一緒に考えていただく活動として実施するものです。

さる7月13日に（社）農林水産先端技術産業振興センター会議室において、第1回「みんなで考えるバイテク推進事業」企画評価会が開催され、平成16年度のPA活動として計画している、①コミュ

ニケーション推進研修（体験研修、メディエーター養成研修）、②コミュニケーション推進ソフト（パンフレット類、PAライブラリー、情報提供グッズ）③意識調査、④重点型コミュニケーション（講演会・フォーラム・展示会）等について、どのような活動を推進していくべきか、（社）農林水産先端技術産業振興センターとしてどのような活動ができるかという観点から、下記の6名の有識者の方々からご意見を伺いました。これらの意見を踏まえ、今年度の「みんなで考えるバイテク」推進事業を実施していきます。

なお、第2回企画評価会を来る8月26日に開催する予定です。

原田 宏	筑波大学名誉教授
高柳 雄一	電気通信大学教授・広報室長
雙木 桂子	東京都消費者啓発員
加藤 順子	株式会社三菱化学安全科学研究所 取締役 副センター長
小林 信一	前筑波大学 大学研究センター 助教授
田部井 豊	独立行政法人農業生物資源研究所 植物細胞工学チーム長

（順不同、敬称略）

総合科学技術会議有識者議員との第3回懇談会を開催

総務課

農林水産技術会議委員と総合科学技術会議有識者議員との懇談会が、7月27日に開催されました。

この懇談会は、農林水産技術会議委員と総合科学技術会議有識者議員との間で、我が国全体の科学技術政策の方向付けの中で、農林水産分野の研究開発が果たすべき役割について共通認識を持つことなどを目的として、平成14年から毎年1回開催しているものです。

懇談会では、農林水産分野における研究に関して、まず、国際農業研究協議グループ（CGIAR）科学理事會理事である、農林水産技術会議の貝沼委員から、「農林水産分野における国際共同研究の現状」



懇談会で挨拶する委員長

として、CGIARの組織、予算、最近の研究成果（アジア稲とアフリカ稲の胚珠培養で得られた収量の高いネリカ米、必須アミノ酸含量を高めたトウモロコシ等）、CGIARに対する人材派遣等の我が国の取り組みなどについて紹介されました。

続いて、話題提供者として招いた長崎総合科学大学の坂井正康教授から、「農林水産分野におけるバイオマス研究の成果」として、草木などの可燃性バイオマスを原料としたプラント（原料をガス化し、化学合成によってメタノール液体燃料を製造する「農林バイオマス1号機」、原料を高カロリーのガス燃料に変換し、このガスを用いて発電を行う「農林バイオマス3号機」）について紹介され、バイオマスの利用は、適切なシステムと適切な利用先の選択によって、経済的にも成立する可能性が高いとの報告がなされました。

これらの報告のあと、出席者による質疑、意見交換が行われました。

また、この懇談会には、農林水産研究の成果の一



挨拶する阿部博之議員

端として、①秋まき小麦品種「キタノカオリ」を原料としたパン、②リポキシゲナーゼを欠失した青臭みのない大豆を原料とした豆乳、③機能性物質「ルチン」を多く含むダッタンソバを原料としたお茶、が提供されました。

技術会議審議概要

平成16年度第4回農林水産技術会議（懇談会）の概要

- 日 時 平成16年7月27日（火） 14：00～15：00
- 場 所 農林水産省農林水産技術会議委員室
- 出席者 齋会長、榊委員、貝沼委員
西川事務局長、宮崎研究総務官、石毛研究総務官、飯田総務課長ほか
- 議 題
 - （1）生物多様性影響評価検討会の開催概要について
 - （2）食品機能性研究に関する検討会の報告の取りまとめについて
- 配布資料
 - 資料1 生物多様性影響評価検討会の開催概要について（平成16年4～6月分）
 - 資料2 食品機能性研究に関する検討会の報告の取りまとめについて

議事概要

（1）生物多様性影響評価検討会の開催概要について （平成16年4～6月分）

遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律の規定に基づき、平成16年4月から6月までに開催された生物多様性影響評価検討会の結果の概要について報告がなされた。

（2）食品機能性研究に関する検討会の報告の取りまとめについて

平成16年6月から7月にかけて、農林水産省における食品機能性研究を一層効率的に実施するため開催された食品機能性研究に関する検討会の報告書の取りまとめについて報告がなされた。

【主な意見等】

○機能性食品に関する研究の出口を考えれば、表示のあり方に関して議論することも大事である。このため、表示制度を所管する厚生労働省との情報交換に努めることが重要である。

○通常摂取される食品の持つ機能性の解明に関する研究成果についての情報をどのような形で出しているかが大事である。食生活指針への反映も視野に入れてはどうか。

Information お知らせ

記者発表

発表年月日	発表事項名	担当課
16. 7. 1	平成16年度「国際共同研究人材育成推進事業」募集開始	国際研究課
16. 7. 1	食料及び農業に用いられる植物遺伝資源に関する国際条約(仮称)の発効について	先端産業技術研究課
16. 7. 12	生物多様性影響評価検討会総合検討会の開催及び傍聴について	技術安全課
16. 7. 16	クローン牛の異動報告のとりまとめについて(H16. 6. 1～ 6.30)	技術安全課

今後の予定

年月日	行事名	開催場所	担当課
16. 8. 19	第5回農林水産技術会議	農林水産省	総務課
16. 8. 24	第6回研究基本計画検討専門委員会	農林水産省	研究開発企画官室
16. 8. 25 ～26	平成16年度子ども霞が関見学デー	農林水産本省 7階講堂	技術政策課

編集後記

巻頭言は、4月から農林水産技術会議委員としても活躍されている貝沼CGIAR科学理事会理事に執筆いただきました。折しも7月28日には国際研究のための新しい組織「持続的開発のための農林水産国際研究フォーラム」も設立されたところです。これについての詳細は次号でお知らせします。

10月から11月にかけて技会事務局をあげて取り組むイベントの詳細が固まりました(3、4頁)。成功に向けて広報も精力的に進めてまいります。

また、7月2日付で農林水産技術会議事務局幹部の異動がありました。次号の巻頭言は西川孝一新事務局長を予定しています。

月刊 技術会議 No.38 平成16年8月1日

編集・発行 農林水産省農林水産技術会議事務局 技術政策課 技術情報室
〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1

T E L : 03-3501-9886 e-mail: koho@s.affrc.go.jp

農林水産技術会議事務局ホームページ <http://www.s.affrc.go.jp/>